

報告五

オカルト・学知・第三帝国…

カーター 『SS先史遺産研究所アーネンエルベ』の周辺

書評

ミヒヤエル・H・カーター（森貴文監訳）『SS先史遺産研究所アー  
ネンエルベ…ナチスのアーリア帝国構想と狂気の学術』

（ヒカルランド、二〇二〇年）

小澤 実

ナチズムに関心あるものであっても、アーネンエルベと  
う言葉聞いたことあるものはさほど多くなかったかも  
れない。ドイツ近代の専門家ですらも、ハインリヒ・ヒ  
ラーが親衛隊の組織として組み込んだこの「ゲルマン古  
」を探究する「学術組織」について、耳にしたことはあ  
たとしても、その実態について把握することはなかった  
もしれないし、さほどの関心も抱かなかったかもしれない

い。日本の文脈に置いた場合、一〇年間のみ存続した特異  
な機関であるアーネンエルベを歴史の中に位置付けるため  
のまとまった情報を得るためには、オカルト人種論という  
観点からナチズムに至る思想史を描き出した横山茂雄『聖  
別された肉体』、ナチズムのフェルキツシュな思想底流を  
論じたジョージ・モッセの『フェルキツシュ革命』とが例  
外的にあるのみ、という状況であった。<sup>1</sup>しかし今、私たち

史苑（第八一卷第二号）

は、これらの研究のベースともなったカーターのモノグラフの翻訳を手にすることができるようになった。本稿では、本書『アーネンエルベ』の議論を軸に、近年の研究を参照しながら、本書の持つ射程を読み解いてみたい。

## 一 著者

著者のミヒヤエル・カーターは一九五七年にザクセンのツィッタウに生まれた。両親の仕事の都合でカナダに移住し、トロント大学で歴史学や音楽学を修めた。その後ドイツに帰国し、ハイデルベルク大学のヴェルナー・コンツェの指導のもと一九六六年に博士論文を仕上げた。その博士論文をベースに一九七四年に出版されたのが原著である。<sup>2)</sup>アーネンエルベ研究の基本書である本書はその後も改訂を重ね、現在では、翻訳書の底本となった改訂第四版<sup>3)</sup>を入手することができる。

博士論文執筆後の一九六七年、カーターはトロントのヨーク大学に招かれる。もともとカナダで大学生を送っていたこともあり、英語も堪能であったカーターは、英独双方で旺盛に研究を発表している。ヒトラーユーゲント、第三帝国の医学、そして第三帝国の音楽などに関するモノグラフを英語で刊行したカーターは、「マイケル・ケイター」

として、ワイマール期から第三帝国期にかけての文化史の第一人者として現在に至っている。<sup>4)</sup>とりわけ、第三帝国時代の音楽に関する三部作は世評が高く、うち一冊は『第三帝国と音楽家たち』として邦訳も得ている。<sup>5)</sup>

ドイツ社会構造史の領袖であるコンツェの指導のもとで博士号をとったカーターは、社会構造、行政制度、個人の人格と業績を緻密に重ね合わせながら、ミクロを集積してマクロを再現する集合人物誌の手法でワイマール期から第三帝国にかけてのドイツを描き出す。圧倒的な情報量で有無を言わせぬカーターの筆致は、ワイマール期には隆盛を誇っていたドイツにおける学問や文化のあり方を歪めたナチズムに対する静かな怒りを読むものに感じ取らせる。

## 二 梗概

本書は、アーネンエルベに関連する刊行資料並びに未刊行資料に基づいて、事実<sup>6)</sup>に事実を重ねたマツシヴな研究書である。青年時代の博士論文ということもあり、英語圏の著作のようにナラティブに緩急をつけて、と言うスタイルはとってない。要約という作業自体を拒むかのような、抑揚を抑えた措辞構成でもある。以下、各章のタイトルのみを記しておきたい。

第1章 「アーネンエルベ協会の創立 一九三五年」

第2章 「初期アーネンエルベの学術研究

一九三五—一九三七年」

第3章 「拡張期のアーネンエルベ」

一九三七—一九三九年」

第4章 「第2次世界大戦までの研究業績」

一九三九年九月」

第5章 「文化政策における警察機能」

第6章 「ドイツ国境を越えた文化政策」

第7章 「戦時下の学術研究」

第8章 「アーネンエルベの軍事研究」

第9章 「戦時中の文化政策の強制的同一化措置」

第10章 「危機」

第11章 「望んだものと現実」

### 三 特徴と論点

以上の内容を踏まえ、評者の関心と連関させた上で、本書の特徴と論点を四つ提示しておきたい。

#### ①個人と組織

本書は、個性ある個人とアーネンエルベという親衛隊内

史苑（第八一卷第二号）

に設置された組織との相互作用の解剖学とでもいうべき研究でもある。アーネンエルベという一つの組織が展開する際に、夢想家である素人学者ヘルマン・ヴィルト、親衛隊長長ハインリヒ・ヒムラー、組織管理に長けた官僚ヴィルヘルム・ジーフアース、博士号を持った東洋学者ヴァルター・ヴェストといった立役者らの反目と協力が一つの軸となっている。

しかしカーターは、その展開の動力をアーネンエルベの内部のみに止めることはない。そこには、第三帝国内で對抗組織となった、アルフレート・ローゼンベルクによる「ローゼンベルク機関」や学位と学識を盾に必ずしもアーネンエルベに協力的とは言えない大学組織との緊張関係も大いに関わってくる。一見すると、ヒムラーの夢想を莫大な資金をもとに実現させようとするアーネンエルベは、親衛隊の組織内権力を盾に自由に振る舞っていたかのように錯覚させるが、現実はそのようではない。ともすれば、興味本位でオカルト的な側面に注目がちなアーネンエルベは、あくまで第三帝国の官僚機構の中で、一定の命令系統、スタッフ、資金という枠組みを堅持しながら稼働していた現実の組織である。残念ながら、莫大な資金が投下されていたであろうことは十分に読み取れるものの、組織全体の財務状況とその資金を組織内の活動にどのように振り分けた

のかの全体図を理解することはできない。

このような（一組織を対象としているために）当然と言えは当然の理解を踏まえるならば、アーネンエルベもまた、第三帝国の官僚機構の中で自らの存在意義を常に探し続けていた組織としてアプローチすべき対象であることを、本書を読み通すことで理解できる。

## ② 古代への憧憬

アーネンエルベは、ヘルマン・ヴィルトの夢想、権力者であるヒムラーの妄想、一応の学知をおさめたヴァルター・ヴュストの野心などが合流したところに成立した擬似学術組織である。それぞれの接点は、ヒトラー自身も理想とする「北方人種」による世界支配を「学問的に」担保する「ゲルマン古代」に対する憧憬であった。しかし、アーネンエルベによる「ゲルマン古代」は、従来の研究蓄積を曲解した、半ば妄想としてのありもしない素人の想像世界である。しかしこの歪んだ古代は、厳密に学問上の手続きをへた事実とそれに基づいて再構成された歴史像に背を向け、「オルタナティブな過去」を求める当時の人々の思想のあり方を反映しているという点で、注目しておく必要がある。

アーネンエルベが成立する背景に、世紀末ウィーン以来のフェルキツシュかつエゾテリツシュな思想潮流のあった

ことは、すでにモッセ、グッドリッチ、クラーク、横山の著書などで適切に紹介されている。<sup>(8)</sup> アーリア人至上主義を支えるナチズムに至るオカルト思想研究そのものは、その後も進展を見ている。以下では、「オルタナティブな過去」という観点で、オカルト研究とは異なる方向の研究の展開を上げておきたい。

一つは、ナチズムの支配者層の歴史意識を明らかにする方向である。一つの転換点はオズワルト・クロー「ナチズムの歴史思想」である。本書では、書評対象書とも大きく関わるヒトラー、ローゼンベルク、ダレー、ヒムラー、ゲッベルスらの歴史思想を各種資料から再現し、必ずしも歴史の専門教育を受けているわけではないが、組織改編や諸政策に対し意思決定可能な人物が、どのような「オルタナティブな過去」を持ち得ていたのかを検討することを可能としている。『アーネンエルベ』では、組織成立当初における、それぞれ素人であるヴィルトとヒムラーの思想的対立をクローズアップし、なおかつヒムラーの「古代趣味」に対してヒトラーは一顧だにしなかったことも指摘している。個人的な好悪の感情や組織内における利害関係もあつたのであろうが、そうした対立要因の根底の一つとして、これら意思決定者が持つイデオロギーとしての「オルタナティブな過去」をめぐる相違も見逃すことはできない。ア

ーリア人言説に基づく生存圏や最終解決という悲惨な現実を招来した、権力者とその権力作用に影響を与える「プラクティカル・パスト」という観点からは、そうした「オルタナティブな過去」の創造と普及の一端を担ったアーネンエルベという組織の展開を見るためにも必須の検討課題でもある<sup>①</sup>。

もう一つは、アーネンエルベに関わった「学者」らの「オルタナティブな過去」を明らかにすることである。もちろんこの点についてはある程度は従来のオカルト思想研究で明らかにされている。しかしそれらは、著作の一部から特徴的な文言を抽出する「存在の大きい連鎖」という觀念史のアプローチであることが多く、生活実態を伴う個人の思想として分析されているわけではない。とりわけ『アーネンエルベ』のように、プロソポグラフィアプローチをとる研究においては、そうした個人の伝記的検討が必須となる。しかし、手記や著作をもとに個人伝記を再現する古典的手法で、このような二流、三流どころか学問的価値のない個人の伝記に時間を割くことはさほどの意義が認められないという理由で、アーネンエルベに関わった「学者」らの著作は、ハンス・ヘルビガーの「宇宙米説」などの一部を除き、十分に検討されない状態で放置されている<sup>②</sup>。しかし例えば、ヘルマン・ヴィルトを対象とした久保田浩の

論考は、この素人学者の持つ「オルタナティブな過去」が同時代の文脈で持ちうる射程を明らかにしているという点で、アーネンエルベ研究をさらに進展させる手がかりを得ることができ<sup>③</sup>。

③ ナチズムと学問 ハイタブ発掘とルーン学を中心に

②では「オルタナティブな過去」を求める素人学者についての可能性を論じてきた。ここでは対照的に、アーネンエルベに関わった専門家についてコメントしておきたい。具体的には、先史学者のヘルベルト・ヤンクーン（一九〇五—一九〇）とルーン学者ヴォルフガング・クラウゼ（一八九五—一九七〇）である。

キール大学教授の先史考古学教授であったヤンクーンは、アーネンエルベに所属した学者の中では最も権威ある学者の一人である。二〇世紀初頭にシュレスヴィヒで再発見されたヴァイキング時代の交易地ハイタブ（デンマーク名ヘゼビュー）の発掘責任者であったヤンクーンは、アーネンエルベから資金を調達し、その発掘成果をアーネンエルベ叢書の一つとして刊行した<sup>④</sup>。第五SS装甲師団ヴァイキングにも所属したナチシンパであったヤンクーンは、戦後一旦公職追放を受けたものの、公職追放が解けたのちは、ゲッティンゲン大学の先史考古学のポジションに収ま

つた。<sup>15</sup> ヤンクーンの主著であるハイタブ研究、定住史研究、戦後彼が中心となつて立ち上げた『ゲルマン古代学事典第二版』、初期中世の交易叢書などは、いずれもアーネンエルベ時代の成果をベースに展開されているものの、今なお、当該分野において最初に紐解くべき研究である。<sup>16</sup>

ゲッティンゲン大学のクラウゼは、アーネンエルベの資金を利用しながら、アーネンエルベのルーン部門を担当した研究者である。ナチズムやアーネンエルベとルーン文字との関係は、アルマーネン・ルーンという、ルーン文字の歴史的解釈とは相入れない偽ルーンを創造した「ヒムラーのラスプーチン」マリア・ヴィリグートに関心が集まりがちであるが、官僚組織の制度的枠内で研究助成対象となっていたのは大学教員であつたクラウゼである。戦後、彼は、戦時中に収集したデータと写真をもとに、ヘルベルト・ヤンクーンとともに、古フサルクによるルーン碑文のカタログを刊行した。これは現在でも最初に参照されるカタログであり、クラウゼによるルーン文字の研究組織は戦後世界最大のルーン文字研究組織として現在に至っている。<sup>18</sup> 他方で戦時中、クラウゼの学問上のライバルであつたギーセン大学のヘルムート・アルンツ（一九二二—二〇〇七）は、アーネンエルベの対抗機関でもあるローゼンベルク機関からの援助を受けて、ルーン文字の研究を行なつていた。<sup>19</sup> ア

ルンツもまた、現在なお利用され続けているルーン石碑のカタログ並びにハンドブックを作成している。<sup>20</sup>

ここで指摘しておきたいのは、ヤンクーンやクラウゼが戦中に積極的にアーネンエルベと関わっていたという倫理的問題ではなく、アーネンエルベの資金を利用して学術的価値の高い成果を残した、という事実である。アーネンエルベの学者は、二流や素人が多数を占めていたとはいへ、中にはヤンクーンやクラウゼのような研究能力で同時代や後世に影響力を持つている学者もいた。学問と戦争協力の問題はそれとして重要な学問の対象であるが、第三帝国下であるからと言って、全ての学問が停滞していたわけではない。カーターは「伝統的な手法によって真理を追求してきた学問は、未知の真理を即座に発見するようなえせ学問にとつてかわられるほど脆弱ではなかった」とも述べる。<sup>21</sup> むしろ「オルタナティブな過去」と直結するゲルマン研究や中世研究は進展していたと言っても良いかもしれない。<sup>22</sup>

#### ④本書が出版される文脈

最後に、本書が刊行される文脈について触れておきたい。監訳者が「本書はヒカルランド初の学術翻訳書の刊行だそうである」と後書きし、また、担当編集者の小澤祥子が『ユリイカ』において述べているように、ヒカルランドは本書

のような博士論文をもとにしたモノグラフが刊行を予期されるような出版社ではなかった。<sup>24)</sup>ヒカルランドは「主として徳間書店の「超知ライブラリー」シリーズ、「超☆スピ」シリーズ、「五次元文庫」シリーズ、そのほか船井幸雄、井沢元彦、茂木健一郎、竹内薫、ベンジャミン・フルフォード、さくらももこ関連の書籍を輩出してきた」石井健資が二〇一〇年四月に独立して立ち上げた出版社である。現在の主力商品も、スピリチュアル系と称される書籍・物品・企画であり、正直なところ、このような傾向を持つ出版社から本書が刊行されたことは驚きを禁じ得ない。実のところ、本書に引き続き、報告四で取りあげられた、イギリスの魔術史研究者オーウェン・デイヴィスによる『スーパーナチュラル・ウオー』も刊行されている。<sup>25)</sup>

ヒカルランドが、必ずしも会社の売り上げに貢献するとは考えられない研究書を、膨大な脚注も含めて刊行するとは、出版不況に喘ぐ学術出版社の現状を思えば、寿ぐべきことであろう。実際、訳者らによる真摯な努力と編集者の小澤の手腕もあって、本書も『スーパーナチュラル・ウオー』も、高い水準の学術書としての体裁を保っているし、膨大な役職名を伴う硬質の原文も一般人でも十分に読みこなせる訳文となっている。「第三帝国の文化政策に対する貢献」という副題が「ナチスのアーリア帝国構想と狂気の

学術」という、ややミスリーディングなものに置き換えられているとしても、内容は損なわれていない（凡例に「ほぼ全訳」とあるのは気になる。<sup>26)</sup>原著と比べて組織図が簡略化されているのは見て取れるが、その他の箇所は対照させてないので評者にはどこが省略されているのかはわからない）。かつて「シオンの議定書」の歴史的研究所の基本書である歴史家ノーマン・コーンの著書が抄訳で刊行された状況を思えば、本書の値段が一万円近くになるとしても、学術成果を保持する立場から見れば良心的であるとすら言えるだろう。<sup>27)</sup>

他方で、担当編集者の小澤が「ときどき他社さんでも明らかにカラーが違う本が飛び出るのをお見受けします。硬派な学術出版社から超古代史を出すほうがよっぽどハードルが高いのではないかと思えますが」と皮肉を述べるように、従来学術出版社として信頼を重ねてきた書肆が、学術的価値の担保されない書籍を刊行する状況も出来している。<sup>28)</sup>商業出版社が購買層の排外感情をすくいとって時流に乗った出版物を刊行することは時として見られる事象であるが、学術出版社が、論争があることを知っているにもかかわらず、そして一旦そのような本を出してしまえば従来築いてきたブランドを変更せざるを得ないこともわかっているにもかかわらず、というのは特異な状況であるかもし

れない。これを単純に出版不況ゆえに売れる本を作ったとだけ理解することはおそらく正しくはない。一応はリベラルな立場が尊重された「戦後民主主義」が担保してきた言説空間が別のかたちに組み替えられつつあることを念頭におかねばならない。

一九七四年の原著初版刊行から四〇年以上経っての翻訳刊行であるが、本書の内容は全く古びていない。古びていないどころか、先ほど述べた四つの観点からは、本書を出発点として、今後さらに掘り進められるべき内容である。他言語に翻訳されたのは本書が初めてであろうし、他言語でカーターの著書に比肩すべき内容を持つ研究書もない。そういった意味では、私たちは、英語圏やフランス語圏よりも、このアーネンエルベに関わる問題系について、専門家以外でもより深く正確に考える参照軸を得た、ということになる。より具体的に言えば、このアーネンエルベとも人脈上関係であるであろう、そしてファシズム下の比較対象となりうるであろう帝国日本における学術行政、人種・民族論、日独関係など論じる点は多い。<sup>(1)</sup> 編集者小澤による熱意、訳者らによる専門家としての訳業、版元による刊行を労い寿ぐと共に、本書がナチズムの専門家に限ることなく、積極的に読み込まれてゆくことを願う。

- (1) ジョージ・モッセ(植村和秀訳)『フェルキッシュ革命：ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』(柏書房、一九九八年)；横山茂雄『増補聖別された肉体・オカルト人種学・ナチズム』(二〇二〇年、創元社、原著は一九九〇年、書肆風の薔薇)；ジャーナリストによる全体像として、ダステイ・スクラー(山中真智子訳)『神々と獣たち：ナチ・オカルティズムの謎』(大陸書房、一九八八年)も参照。また、チハット探検の観点から現在にまで連続と続くアーネンエルベの影響を紹介した文献として、浜本隆史『ナチスと隕石伝説：SSチハット探検隊とアーリア神話』(集英社新書、二〇一七年)。
- (2) Michael H. Kater, *Das „Ahnenerbe“ der SS 1935–1945. Ein Beitrag zur Kulturpolitik des Dritten Reiches*, Stuttgart, Deutsches Verlag-Anstalt, 1974.
- (3) 出版社のHPでオープンアクセスとなっている(https://www.degruyter.com/view/title/318765)。
- (4) 以下、単著のみ挙げておく。一九八三年以降の著作は英語で執筆されており、その多くは翻訳されてドイツ語圏に「逆輸入」されている。Studentenschaft und Rechtsradikalismus in Deutschland (1918–1933). Eine sozialgeschichtliche Studie zur Bildungsreise in der Weimarer Republik. Hamburg, Hoffmann und Campe, 1975; *The Nazi Party. A Social Profile of Members and Leaders 1919–1945*, Cambridge, Mass., Harvard UP, 1983; *Doctors under Hitler*, Chapel Hill, University of North Carolina Press, 1989; *Different Drummers. Jazz in the Culture of Nazi Germany*, Oxford, Oxford UP, 1992; *The Twisted Muse. Musicians and Their Music in the Third Reich*, Oxford, Oxford UP, 1997; *Composers of the Nazi Era: Eight Portraits*, Oxford, Oxford UP, 2000; *Hitler Youth, Cambridge, Mass., Harvard UP, 2004; Newer Song for Hitler: The Life and Times of Lotte Lehmann, 1888–1976*, Cambridge, Cambridge UP, 2008; *Weimar. From Enlightenment to the Present*, New Haven, Yale UP, 2014; *Culture in Nazi Germany*, New Haven, Yale UP, 2019.
- (5) マイケル・H・ケイター(明石政紀訳)『第三帝国と音楽家たち：歪められた音楽』(アルファベータ、二〇〇三年)。原著は *The Twisted Muse. Musicians and Their Music in the Third Reich*, 1997である。後書に於けば、*Different Drummers*と *Composers of the Nazi Era* と合わせたナチズム期音楽三部作を全訳する予定であったが、今に至るまで実現はしていない。
- (6) コンツェの社会構造史についてはW・コンツェ『ドイツ国民の歴史：中世から現代まで』(創文社、一九七七年)を参照。コンツェを含む戦後ドイツ歴史学の位置づけについては、ゲアハルト・リッター(早島瑛訳)『新しいドイツの社会史』(関西学院大学社会学部紀要)五六、一九八八年、一―一八頁。
- (7) ローゼンベルクについては、フランクリン・ローター・クル(小野清美・原田一美訳)『ナチズムの歴史思想：現代政治の理念と実践』(柏書房、二〇〇六年)、八四―一二六頁を参照。ローゼンベルクの思想と日本との関係については、阿部善彦『「神秘主義：Mystik」というローレライの幻想

- ローゼンブルク『二十世紀の神話』、南原繁、西谷啓治のエックハルト解釈からの検討―』『中央大学文学部紀要』二六七（二〇一七年）、一〇五―一三五頁。
- (8) Nicholas Goodrick-Clarke, *The Occult Roots of Nazism*, London, Tauris, 2011(1985).
- (9) 横山茂雄「三十年後のあとがき」『増補聖別された肉体』三三一―三四四頁を参照。とりわけフェルキミン運動についての研究はドイツ語圏の歴史学と宗教学で進展している。それも含めて近年の動向を簡潔にまとめたのは Julian Stube, “Nazism and the occult”, in: Christopher Partridge (ed.), *The Occult World*, London, Routledge, 2015, pp. 336-347.
- (10) クロル『ナチズムの歴史思想』（柏書房、二〇〇六年）。
- (11) 『フラクティカル・ナチスト』のあり方と実践については、本特集の松原によるレビューを参照。そして批評されている書籍に加えて、北條勝貴編『療法としての〈歴史〉』（森話社、二〇二〇年）も参照。
- (12) Christina Wessely, “Karriere einer Weltanschauung. Die Weltislehre 1894–1945”, *Zeitgeschichte*, 6(2006), pp. 3-22.
- (13) 久保田浩「ナチズム期の〈古代〉表象の形成―H・ヴィルトの〈アトランティス母権制〉論をめぐる」平藤喜久子編『ファンタズムと聖なるもの／古代なるもの』（北海道大学出版会、二〇二〇年）、二一九―二四四頁。
- (14) Herbert Jankuhn, *Haithabu – eine germanische Stadt der Frühzeit*, Neumünster, Wachholtz, 1937.
- (15) 彼のナチズムに対する協力については、ホジミン後継者の  
 のハイロ・スタイヤーを始めとしてすでに多くの研究がある。Dirk Maharski, *Herbert Jankuhn (1905–1990). Ein deutscher Prähistoriker zwischen nationalsozialistischer Ideologie und wissenschaftlicher Objektivität*, Leidorf, Rahden, Westf. 2011; Heiko Steuer, “Herbert Jankuhn – SS-Karriere und Ur- und Frühgeschichte”, in: Hartmut Lehmann and Otto Gerhard Oexle (eds.), *Nationalsozialismus in den Kulturwissenschaften*. Band 1: *Fischer, Milieu, Karrieren*. Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen 2004, pp. 447–529.
- (16) ハイタブ研究は、初版では副題が「初期時代のゲルマン都市 (eine germanische Stadt der Frühzeit)」であったにもかかわらず、戦後は「ヴァイキング時代の交易地 (ein Handelsplatz der Wikingerzeit)」と置き換えられた。Wolfgang Krause, und Herbert Jankuhn, *Die Runeninschriften im älteren Futhark*, 2 vols. Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1966; Herbert Jankuhn, Heinrich Beck, Hans Kuhn, Kurt Ranke und Reinhard Wenskus (eds.), *Reallexikon der Germanischen Altertumskunde*, 35 vols., Berlin -New York De Gruyter, 1973–2007; *Untersuchungen zu Handel und Verkehr der vor- und frühgeschichtlichen Zeit in Mittel- und Nordwestropa*, 6 vols. Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1985-95.
- (17) ヴェリグートについては、横山『聖別された肉体』二一五―二二三頁。オカルティストの著作であるが、Stephen Flowers and Michale Moynihan, *The Secret*

King, *The Myth and Reality of the Nazi Occultism*, Feral House, 2007. フラワーズはゲッティンゲン大学で博士号を取得したゲルマニストでもある。

- (18) ゲッティンゲン大学のルーン文字研究室の教授ボジション継承者であるクラウス・デューウエルは、クラウゼの研究を引き継ぎつつ、現在入手しうる最高のルーン文字研究ハンドブックを刊行した。Klaus Düwel, und Robert Nedoma, *Runenkunde*, 5ed., Berlin, Metzler, 2021. またこの研究室の歴史に關つては、Klaus Düwel, "Runenforschung in Göttingen", in *Historica Archaeologica* (RGA-E 70), Berlin - New York, De Gruyter, 2006, pp. 623-660.
- (19) 第三帝国におけるルーン研究については、Ulrich Hunger, *Die Runenkunde im Dritten Reich: Ein Beitrag zur Wissenschafts- und Ideologieggeschichte des Nationalsozialismus*, Frankfurt am Main, 1984.
- (20) Helmuth Arntz mit Hans Zeiss, *Die einheimischen Runendenkmäler des Festlandes*, Leipzig, Harrassowitz, 1939; Helmuth Arntz, *Handbuch der Runenkunde*, 2. Auflage, Halle & Saale, Niemeyer, 1944
- (21) 膨大な研究が刊行されているが、さしあたり、ペーター・シュットラー(木谷勤・小野清美・芝健介訳)『ナチズムと歴史家たち』(名古屋大学出版会、二〇〇一年)・ハンス・ヘニング・コーテューム(三佐川亮宏訳)『オットー・ブルナーとナチズム』『時代を巧みにくぐり抜けてきました』(上)(中)(下)、『思想』一一三六(二〇一八年)・一一〇一―一三三頁、一一三八(二〇一九年)、六八―八七頁、

史苑(第八一卷第二号)

一四二(二〇一九年)・一七七一―四三頁。  
(22) カーター『アーネンエルム』、六六〇頁。

- (23) 例えばパーシー・エルムスト・シユラムの中世シンボルの研究は、第三帝国期のシンボル研究の推進により大きな成果を残した。David Thimme, Percy Ernst Schramm und das Mittelalter, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 2003などを参照。また東方植民研究については、千葉敏之「閉じられた辺境：中世東方植民史研究の歴史と現在」『現代史研究』四九(二〇〇三年) 一―三三頁。
- (24) 小澤祥子「トンデモと学術の狭間から」『偽書の世界』二四八―二五一頁。
- (25) <https://www.hikariland.co.jp/abouts/>
- (26) オウエン・デイヴィス、江口之隆訳『スーパーナチュラル・ウオー―第一次世界大戦と驚異のオカルト・魔術・民間信仰』(ヒカルランド、二〇二〇年)。

- (27) 『アーネンエルム』、六頁。
- (28) ノーマン・コーン(内田樹訳)『ユダヤ人世界征服陰謀の神話』(ダイナミックセラズ、一九九一年)。
- (29) 小澤「トンデモと学術の狭間から」二四九頁。
- (30) 前川一郎編『教養としての歴史問題』(東洋経済新社、二〇二〇年)を参照。

- (31) 例えば、岡正雄とドイツ語圏の民族学研究という接点に触れる以下の研究などは、本書がもっと早く刊行されていれば、さらに議論を深めることができたのではないだろうか。坂野徹『帝国日本と人類学者 一八八四―一九五四』(勁草書房、二〇〇五年)・中生勝美『近代日本の人類学史：帝国と植民地の記憶』(風響社、二〇一六年)・清水雅大『文

オカルト・学知・第三帝国（小澤）

化の枢軸・戦前日本の文化外交とナチ・ドイツ』（九州大学出版会、二〇一八年）。中生の次の論考も参照。中生勝美「民族研究所の構想と『民族研究講座』共同研究」第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学グループ編『国際常民文化研究叢書一』「民族研究講座」講義録』（神奈川大学常民文化研究所、二〇一五年）、三五五―三七四頁。

（本学文学部教授）